



文庫「孔子聖堂」・左手の青葉は多久聖廟からの「楷樹」3株

亀陽文庫の孔子聖堂創建について

鎌倉時代、仏教とくに禅宗の隆昌を併せて五山文学とされる儒学を兼備する学僧も多くなる。室町時代、足利一門に好学が多く、下野国足利荘に足利学校の建設となる。経営は学僧に依存するが、後に徳川家康が重用した僧天海は足利学校に学んだ一人という。室町時代、僧俗による古書寄進も多く座舎(学校のこと)として機能を充実した。これに小田原の北条氏も援助し学校最盛期を迎える。江戸時代になると徳川幕府も校舎修復費など再三援助し、こうした中で孔子像積奠の執行も見られた。

いま一つ、金沢文庫(現横浜市金沢区)がある。北条幕府の要職をつとめながら好学の北条実時は、京都の清原教隆に指導を得て、多年にわたる収書を鎌倉の自邸火災に焼失した後、金沢荘(現横浜市金沢区)の別荘に文庫を築造した。後年(一二五八)、自ら文庫に隠棲し、専ら書写点校に専従しながら益々収書に努めた。以後、良き後継者を得て文庫充実を期されたが、その後は衰亡に流れ、わずかに遺跡をとどめる程度であったが、地元有志の熱意で現代

は金沢文庫として博物館となり、流失遺物等も回収整備されている。残念ながら孔子像は失われてその伝統行事も現在はされていない。

中世以後、とくに近世(江戸時代)には儒学教育の広がりによって孔子像も飛躍的に多くなった。なぜ、孔子像かといえば儒教受容の歴史の中で受け手の心をうつすシンボルだからとされるのは戦後の孔子像と積奠の調査に全国をまわられ本誌でもおなじみの翠川文子先生である。とくに、わが亀陽文庫が収蔵の孔子像を世に出す機会を与えられた先生は、孔子像を訪ねる旅の中で、中国伝来の文庫孔子像が安住の地を得た幸運に出会ったことは近来にない喜びと、祝福を述べられたのである。

翠川先生のお蔭で、お隣りの多久聖廟との密接なつながりもでき、同地の尾形善郎、服部政昭両氏の御協力で、孔子の故里「中国山東曲阜」の二七〇〇年に及ぶ歴史の銘木「楷の樹」に直接樹脈を引く苗木の植栽を得た。これは文庫「聖堂」の関係者のもとより、御来館を得る方々に永遠の祝福を享受されることになる。

写真：杉山 謙

「老子」を聴く

安 陪 光 正

楷樹薫風

久々に能古の渡船場に立った。波止場の向うから白波をたてて渡船が近づく。かすんだ海の上に靄々たる能古島が横たわる。島へ渡る時はいつも愛犬(ラブラドル)・フィルを連れてくるのだが、今日は九大の福田教授の講座「老子」を聴くのだが、フィルを連れてくる訳にはゆかない。訓練された盲導犬なら一、二時間の講義は主人の足下で聞くものだが、フィルには一寸無理だろう。いつも共に歩く島の山路を胸にえがきながら、フィルが一緒に歩かないのは少し淋しかった。

老子より映画の方がいいと言った妻、渡船場までの運転を引き受けてくれた島君、受講生三人、思いはそれぞれのようにだ。船は十二時十五分発、島が近づくと、島山は木々それぞれに若葉の妍を競っていた。あちこちに見える黄ばんだ竹山、若葉の山腹に見える小学校、その下に博物館がキラキラ光っていた。初夏の船着場へ、二百の行楽客がドッと吐き出さ

れる。子供づれの父と母、若いカッブル、手に手に弁当を持った職場の一団、釣竿を手の男たち、彼らにまじって私たちも小手をかざして陽射しの中を歩いた。左手のバス停には、アイランド・パークへ行くつつじ見の人達が長い行列を作っていた。それを横目に博物館の近道へ歩いた。近道はすぐ石段となり、左手から若葉が茂って緑陰を作る。石段の所々に八重桜がちらばり、仰ぐとまだ枝上にも残っていた。この花は吉野のような落花の風情はないが、かたまり咲いて優艶である。昔母が作っていた花の塩漬を思い出した。上の通りへ出ると正面に、博物館の事務所が葉桜大樹の下にのぞいていた。受付をすまし、だらだら坂を登ると七室連房の上り窯跡へ出た。そこから若葉山をバックに、新築成った孔子聖堂が仰がれた。堂の前には小さな楷樹が二本、それぞれに石囲いして大事に植えられていた。多久聖堂のものと言うが、若葉をまとった一米にも足らぬ若木、閑谷学校ぐらい

の大樹となり、見事な紅葉を見せるのは五十年先のことだろう。

聖堂の横を通って雑木林の小径をゆく。乾いたカサカサの落葉、くぼ地に溜ったドングリ、あちこちにアザミが咲き、ワラビが生える。地に敷く一群のチシバリの辺は、パッと花明りしていた。青空をバックに、クヌギ・カシ・タブ・ハゼなどの疎林が若葉の彩を競う。クヌギは若葉の下に黄色の花房を垂れ、ヤシヤブの小枝には黒い果球を付けていた。天地の静寂を破ってウグイスが鳴く。眼下に波止場が見え、海をへだてた百道のドームやタワーがかすんでいた。ふと目を上げると、本館前で誰かと話しておられる庄野先生が見えた。

一八点紫

講義室は本館の下にある。建物が山の斜面に建っているので地階のようだがそこが一階で、窓から若葉山や海が見下ろせる。明るい落ちついた講堂、五十人は入れそうである。今日の受講生は二十三名、男女半々、老子だから若い人は少ない。先生の教卓のかたわらに花台があり、見事な高取の花びんに一八が生けてある。講義を聞きながら、焼物には二人の

作者がある、一人は作った人、もう一人は歳月と言う作者だと、誰かが書いていたのを思い出した。気品と風格を備えた古高取、やはり能古博物館ならではの風情である。

今日は初日、老子序説と言ったところ、あまり面白くないので塩と砂糖で味付けをしますと、先生がおっしゃる。内容は、老子と言う人物についての史記による説明、史記会注考證による老子化胡説、伯夷・叔斎が首陽山で餓死したのに対する儒家的、又道家的解釈、すなわち生命と正義とが対立した場合、人は極限に於て命を捨てて義をとるか、義を捨てて命をとるか等についての話があり、次回から本論に入るとの事だった。

無用之用

小林東五先生は、昭和五十六年長崎県対馬の北端に對州窯を築かれ、高麗李朝の再現をめざし、井戸・三嶋・刷毛目・粉引などの茶器を焼いておられる。また詩書・篆刻にも造詣が深く、かつて私は三か月先生の足下に学んだ事がある。昨秋先生の展覧が大阪で開催されたが、そのカタログの序に、老子を引用して次のように書いておられる。

「三十本の輻が集って一つの轂を共有している。その空虚なところが車の用をなしている。粘土をこねて陶器を作る。陶器の用はその空虚なところにある。戸口や窓をあけて室を作るが、それで室が役に立つ。だから有が役に立つのは、無が働いているからだ（集英社 全釈漢文大系 老子 斎藤响先生日文）」

こんな意味の一章があります。老子の章の中に、陶器が喩えとして登場してくることも私にとってうれしいことなのです。『有が役に立つのは無が働いているからだ』と説くくだりは、最も私の好むところです。茶を点て、はじめて息づくような茶盃が、料理を盛ってにわかに沓えくとするような器が造りたいと、

ずっと念じております」

輻は車輪の轂から外輪へ向けて放射状に出ている細長い棒、轂は輻が集まる車輪の中心部である。だから、形あるもの（有）が役に立つのは、形なきもの（無）がその根底で働いているからだと言っているのである。

昨今のアパートは合理的にできていて、一寸の無駄もない。昔の家には広縁があり、納戸があり、広い土間があった。無駄とも非合理的とも言える空間があった。その空間がい

ざと言う時役に立ち、かねては人に潤いと安らぎを与えた。今の教育は合理的、実地的、受動的である。大学入試にそなえて、塾や家庭教師に振り廻される。受験以外の学問、趣味、運動などが、長い人生で、真の人間を育てるのに役立つことがわかっていても余裕がない。金になるなら大抵のことはするが、金にならないことはしない。利害損得を先ず考えるのが人情である。この老子の教えは、損得から言えば無用の長物である。若い時から何度も読み、難解ではあるがなお心惹かれる老子であった。現代文明のただ中にあるからこそ、己の原点を見つめるのに役立つであろう。

花菜千里

この度能古博物館では、孔子聖堂建立記念行事の一つとして、論語・老子・史記・伝習録の四つの中国哲学講座を開かれ、大学の専門家による知識を開放され、我々は老子を聴く天機を与えられた。中国古典は難く天機であり、或は読む人によりまた解釈を異にするとも言う。老子八十一章は紀元前の書、しかし今に人の心に生き、精神的支柱となる。かかる古典の精神は、時代を超え、国を超

え、人類に普遍的である。成書によれば、老子は戦国時代における楚の国の人、かかる名者を著した老子の人となり、彼を育てた楚と言う国、その国の世相や文化、民族の生命力を今私は改めて想うのである。先日私は重慶から長江三峡を下り、西陵・武漢など、かつての楚

地の春風に吹かれることができた。広漠たる花菜千里の此所彼所に、戦国時代の古城跡や古戦場が残り、花菜の香にむせて歩いた。楚天は、花菜明りに染められて明るかった。二千年の昔を今に、風月同天、何も変らぬように大地も人も息づいていた。



楚の国の荊州古城東門、この城壁15kmは外濠と共に完全に残っている。築城は紀元前の戦国時代、修理が何度もくりかえされたと言う。

大儒 亀井昭陽伝(七)

庄野寿人

・昭陽烽火台番に就く(文化六年)

前号で、亀井昭陽に予期しない烽火台番という新しい番士役が下命されたこと。この時、昭陽は自分の書齋拡張ができ、塾生たちにも従来にない意気込みを見せていた。

昭陽三七歳、学問、心気ともに充実による満を持していたのである。

これに烽火見張りという職務に就かされるのは心ない藩の仕打ちと思われるが、昭陽は少しもためらいを見せず勤務に応じた。

幸いに、十日間の山籠り勤めの留守は、長州藩の留学生「片山子沢」が代講を引受けてくれた。これで山中の勤務は、相役三名の交替によって自分の勉強時間ができ、他からの訪客など雑事の介入がなく最善と考えたのである。しかし、この昭陽予測は甘く当てはずれであった。

昭陽の烽火番勤務は烽火台設置六山の内、鞍手郡「六岳」(むつがだけ)に始まる。福岡城下から直線で約六五軒の距離。昭陽一行は途中の赤間宿に一泊。これに地元医師で、

父南冥の高弟でもあった「鷹取宗哲」が、酒肴持参の欲待をしてくれた。

こうした昭陽の烽火番道中を聞き伝えて慰問してくれる亀井塾の旧弟子は意外に多く、昭陽に戸惑いと快心をもたらす。

また、途中の民家に小憩して、思いもしない父や自分の揮毫が額装され掛軸となつて出会うこと再三で、これには少なからず驚きである。

昭陽の六岳上番も、三、四日を経過すると、相役となつて起居を共にする丸山利八、善竹二郎兩名の気心と生活までおよそ推察される。どちらとも昭陽と同じ城代組士であるが組士総員三〇〇名、この中で昭陽は兩名に会う機会はなかった。善の扶杖持は拾五石四人扶持、丸山は拾石四人扶持。この収入は前者が年収米五十三俵、後者は四十二俵である。昭陽は十五人扶持、年収七十五俵、組士の中では中の上にされる給与である。丸山は家計の足しにする内職仕事をもち込んでいる。缺(はさみ)

を使って薄紙を切り、これを揉んで積む。何になるのかと聞くに「帰宅して、糸より車を使い、さらに紡いで、綿布の緯(よこいと)にする」という。

廿七日、村庄屋「宗次」が毛辺紙十五張を持参し、昭陽に書を乞う。同人は郡中の豪農で、さすがに人物慎重、少しもあくせくしたところがない。美酒と鶏肉煮を持参する。昭陽が「一緒に飲みますか」と、云うのに「幸甚に思います」と、宗次の答えである。よつて破坐(足をくずす)して、飲み始める。宗次、昭陽の盃を受けて「器が小さいですね」という。よつて昭陽は、携帯していた平戸焼の茶碗を取り出し、宗次二杯、自分は三杯を飲むうち、宗次はついに横臥して呼べども起きず。宗次がすっかり心を許した格好に、昭陽は愉快を思つた。

廿八日、中野左逸が松山三益を伴つて昭陽慰問に登山して来た。兩名とも亀井の旧門下である。とくに、中野左逸は、三年前に昭陽が秋月侯に望まれて父南冥の主著『論語語由』を江戸出版のため、藩主の江戸参勤に加えられて東上した際、若い門人の左逸が郷里の父に望まれ「良い機会である。是非、先生のお供をして

江戸に上り、お手伝いと自身の見聞を広めて来い」と、充分な旅費を与えられ、八カ月に及んだ江戸往復と滞在を共にし、語由出版の板木校正を手伝つてくれた。昭陽愛弟子の一人である。左逸は、子供の頃から馴れた山であると夕景が暗くなるまで、持参の佳肴、美酒二瓶を同幕全員に供し、西牌(とりの刻、午後6〜7時頃)に二生帰る。

廿九日、晴、初秋の気は高い。六岳より大勢を領し展望するに、直方、植木、木屋瀬駅(駅は宿場のこと)感田、香月、知古、金剛、笠木、本城、上下新入の諸聚(町や村々のこと)あり。山に観国、飛狐、龍王、帆船、尺岳、石峰あり。水に、高瀬川、若宮川あり。飯塚川(上流から彦山川、下流になると遠賀川となる)は最も大なり。白帆、鷗鷺の如く上下す。若松港・黒崎海もまた東北に練映して景を為す。

以上は、昭陽「烽火日記」原文を意訳して書いた。さて、ここで昭陽が眺めた時代の六岳と、現代の六ヶ岳を認識する好資料があるので参考にする。

六岳は、六ヶ岳が正しいようである。標高は三三九メートルで低山の印象を受ける。同山は直方市

と鞍手郡の鞍手、宮田の一市二町の境界を形成する山並みの総称をいう。最高は旭峰で、この標高が右の通りである。直鞍地区の象徴的にされる福知山九〇一メートルがありながら低い六ヶ岳が親しまれる。登ってみると直鞍地区が一望できて、行政の境界にあること、市や町の連帯感と協力を生んでおり、いふならば、地域の「へそ」である。こうした見地で、「六ヶ岳を考える会」が組織された。同会々長の宮田博樹さんは「直方、鞍手、宮田。町が違ってても自分たちの山。会員はシーズンになると、登山道の整備や草刈り、道案内の看板立て、みんな手弁当奉仕。これこそ郷土愛。六ヶ岳がその求心力を生むのです。」と。

筆者と、宮田さんは未知。三年前の七月八日西日本新聞(夕刊)記事を読んで、必ず昭陽の峰山日記を書く時がくる。その時は、この記事を利用していただくこと勝手に決めていたのである。いま、この誌上から失礼を謝しながら宮田会長にお許しを願う次第。何卒、御海容を乞う。

この宮田さん談話の記事でわかることは、六ヶ岳は六峰が連なった山

並の総称で、この主峰が旭峰と呼ばれる。さて、福岡藩が烽火台を設営したのは、六連峰のどの山であるかという疑問が生じることになる。要は、連結する前方の烽火台「龍王山」(粕屋郡篠栗町)の烽煙を見て、後方の石峰山(北九州市若松区)に烽煙を送る。この見通しが良い山でなければならぬ。昭陽が廿九日、晴れとした展望の中で、龍王、石峰両山が見えるとしているが、これは六ヶ岳とした山並み連峰の一つ、きつと六峰の主山である旭峰であると考えが、これを絶対とは言い難いことにもなる。要は烽火台跡が残り、その確認が最要件となるが、現在では六峰火台で遺跡の存在はないとされている。これは各烽火台とも僅かに三カ年で使用止め、六年後の文化十三年五月、幕命によって各施設は撤去された。元々この烽火制について佐賀、福岡両藩とも、その効用に疑問を持ち設備にも急ごしらえで間に合わせものであった。好都合と云うか、この施設の実用が全くなかったのが事実である。従って遺跡として残るほどのものもなく、取り壊しも麓村の責任でされたので、殆ど持ち去られたと言われている。

午餐の後、老人が手を背に組み登

り来る者あり。昭陽、六岳に登る途中に小休止した家翁である。屋内に父南冥の書を掛け、また昭陽の書もあり、と見せる。昭陽が名乗るに驚き「高士、なんぞ卑しき山番を勤めるか」と嘆じた。名を清作という。すでに対面せる宿駅の差配(あれこれ世話する役)を勤める助市の父なりと拝謝。このためわざわざ登り来たのである。また語るに「山居するに終身なり。度々国老(藩重臣をいう)の狼手となり信頼をいただけり」と。余、問うに「前家老の久野太夫は」と。老人、背を伸ばし眉をあげて、嘆じて曰く「厳然たる国老なり。小人(つまらぬ男をいう)と語るに、未だ曾て齒を見せず。今は、則ち亡し」と。申牌(午后四時頃)、塾生の龔三郎来りて曰く「昨、田渕左冲、秋山五八郎と、狗嶺を越え、芳川を涉りて、有吉金平に逗まる。夜、黒くして道を失し、備るること甚だし。是を以て来ること遅れたり。金平と二生と、中谷に待つ。俱に来るべきや、否や」と。余、曰く「烽禁厳にして、外人の来るを許さず、翠微に家あり。降れ。余、これに就いて見はん」と。乃ち寅弟(相役のこと)に言いて、清作氏に造る。四生再拜す。家君・婦氏・友之(少

栗のこと)及び子沢の書を致し、朋

樽鶏膳(酒樽鶏肉のこしらえ)を陳ねて曰く「同門の貢物なり」と。金平もまた、朋酒魚蘆を饌る。爵九たび(何回もの意)行る。余曰く「日暝れたり。我を以て久しく止まるべからず」と。三生を戒めて曰く「我、いづれにしても帰るべし。皆来りて新入村に待て」と。助市、酒肴を担いで従う。帰りて、相役をして飽食せしむ。喜ぶこと甚だし。

九月朔日。林莽(深い雑木山)の間に雲気あり。茸々然たり(下草の茂るさまをいう)。少間して、日、観国山に出づ。紫翠、横射すれども雲氣升らず。景、春月の如し。

長門の中野源藏、助市宅に至りて謁を通ず。乃ち下りて見ふ。相對するに悄然たり。詩あり。筆を走らせ、次韻して曰く「君、何すれぞ白雲の居を叩く。言わんと欲して言わず。感余り。去れよ。秋天、雁字多し(雁が八の字如く列を為して飛び行くさま)。神交重ねて結ぶ。空中の書」と。源藏喜び、為めに近作を折扇上に題して別る。有吉八助なる者来る。金平の父なり。素餅一筐を貽る。助市、錐栗數百顆を貽る。山すでに味し。左逸、突如として来る。尙僕として足を捫ず。之を問へば乃

能古博物館だより

ち曰く(崕路を啓くに、迂なること甚だし。弟子、山峽より蹊無きに蹊して直上す。迷陽迷陽(馬鹿なことをしたの意)、大いに吾が行を傷つくと。と。之子、膽氣従来、是の如き者あり。愛すべし。之を飭り酒を以てす。且に酔いて寝ぬ。丙夜、興き神燈を挑げて、日記を草す。

(註) 以下、本紙面のため原文を抄録して稿を進める。

二日、左逸、来て絵師「松苑」なる者の作品三紙を出し贊を需める。芭蕉翁に題して曰く。「人、名利に徇いものなく、ただ翁のみは高引自ら遂ぐ。是を以てその言、醇(まじりけがない。純粹である)の如く、永世人を酔はしむ。嗚呼、翁の徒にして、翁の徒にならざるもの有り。その像に再拜し我が玄賞を録す」と。白描(余白を多くした絵)の山水に題して曰く(水石、琮々として、崖石に籟(妙な風韻を出す)を生ず。一抹の万象、妙、画外に在り)と。両真人に題し曰く「疆木は沈むべからず、弱水は浮くべからず。丈夫、微猷あり、窮居すれども、淫せず」と。疇昔(前日または前夜をいう)、左逸、この書を披いて曰く「青蓮(李白)、鯨に騎る」と。余、酔眼模糊として、ただ李白の顔の類せざる

を詰るのみ。ために一贊語を構えて曰く、「色美しき者は妬まれ、才高き者は放たる。李白は鯨に賀し、長風浪を鼓す。朝来、披見して大いに之を改めんと矢ふ」と。之子、愛すべし。

(註) 愛弟子の左逸が、絵画三幅を持参、題贊を求めたのであるが、昭陽は直ちに応じ、立派に仕上げたことがわかる。昭陽は、文を以て知られ、書も格別であった。とくに画贊は即妙の名句を以て絵を活かしたので、その依頼は多く、これは今日よく残っていることわかる。

昭陽の学識の深さ、練達と円熟で画作に応じて史実、故事の引用、画題によって即物的な効用と賛意を加える。その書式一体となって画を盛り上げていく。これらは、昭陽が広く愛された一面といえる。

午後、神谷喜平、武谷元長が珍味佳肴なりと称し持参する。

未牌(午後二時頃)三郎、左冲、五八郎、新入郎に至る。前日の約を踏むなり、一猴子(雑役夫をいう)を走らせ来り告ぐ。余、左逸に謂ひて曰く「替人(烽火番の交替者)未だ至らず。三生を以て足下に附す。これを善処せよ」と。左逸曰く「謹んで諾せり。ただ植木の大保長(庄

屋のこと)、以て今夕を永くすべし」と。乃ち帰る。官途の忙がわしき、我をして二三子に妄言せしむるものなり。心、甚だ平かならず。夜、胸腹に物ありて、遂々然たり。紅椒粉を熱水に投じ、攪してこれを飲むに遂々たるもの去る。

余は好んで、辛味を食す。たで、わさび、子母、而して蕃椒(とうがらし)を最となす。往く所、必ず携う。乃ちすでに、束せる衣嚢を解き矮几(小机のこと)を出して、書を翻く。昔、兼好法師、言へるあり。「短繁夜誦し、古人を尚友するは、楽しみ之に過ぎるはなし」と。

三日、暁雨窓を撲つ。白衣に命じて幕を撤せしむ。寅弟(相役)替人を待ち、眼すでに穿んで、呻吟こもごも発す。

午牌、保長「宗次」、童奴をして走って報せしむ。替人至ると。皆、跳起し、急に酒を暖めて以て勢を助く。至る。百事を付渡し、かつ示すに司城の書を以てす。替人曰く「十八の烽子。皆、昨を以て発す。近地は皆即日にして代わるべし。ただ、六岳と石峰は、経宿せざるを得ず。蓋し筆を執る者、註語して乃ちしかるなり」と。助市、走りかつ呼びて曰く「悵別々々」と。すでに風雨横

ざまに飛び、山坡を飛下す。人の傘を持して升る者あり。これを問えば、郵甲頭(村役人)の来迎せしなり。保長「宗次」宅に至りて憩う。千次酒を請いて去る。すでに申牌(午后四時頃)。甲頭、送って植木郎に至り、香月五三郎を叩く。迎えて曰く「君がために庭園を汎掃す。宿らんことを請う」と。余曰く「征夫、捷々たれば、一酬を得れば足れり」と。五三郎、氣宇軒豁、余か言の欺かざるを知り、乃ちまた強ひず。酒を置く。三生出でて飲を扶く。

纏縛されること十日、談、酒と盛んとなる。保長宗次、線籠一筐、鴨鶏一隻を貽る。夜暗し、松明を燃やして行く。丙夜、赤間駅に極る。遞長すでに一店を扱びて以て待つ。

四日、鳴鶏夢を驚かす。乃ち興く。店の婦、妍しくして、且つ丈夫をして客たるを知らしめず。乍ち疑う。東海五十三亭に在るかと。三生に房金を問はしむ。婦曰く「一泊有半」と。乃ち四百八十文を予ふ、余、公事を以て往来するに、食券を作り、姓名を後に署し、之を授く、店主、之を保長に致し、保長、之を懸尹に達し、青蚨百を賜はるが、例なり。蓐食未だ終わらざるに、駅馬、門に來り嘶く。乃ち遽かにして道に就く。

能古博物館だより

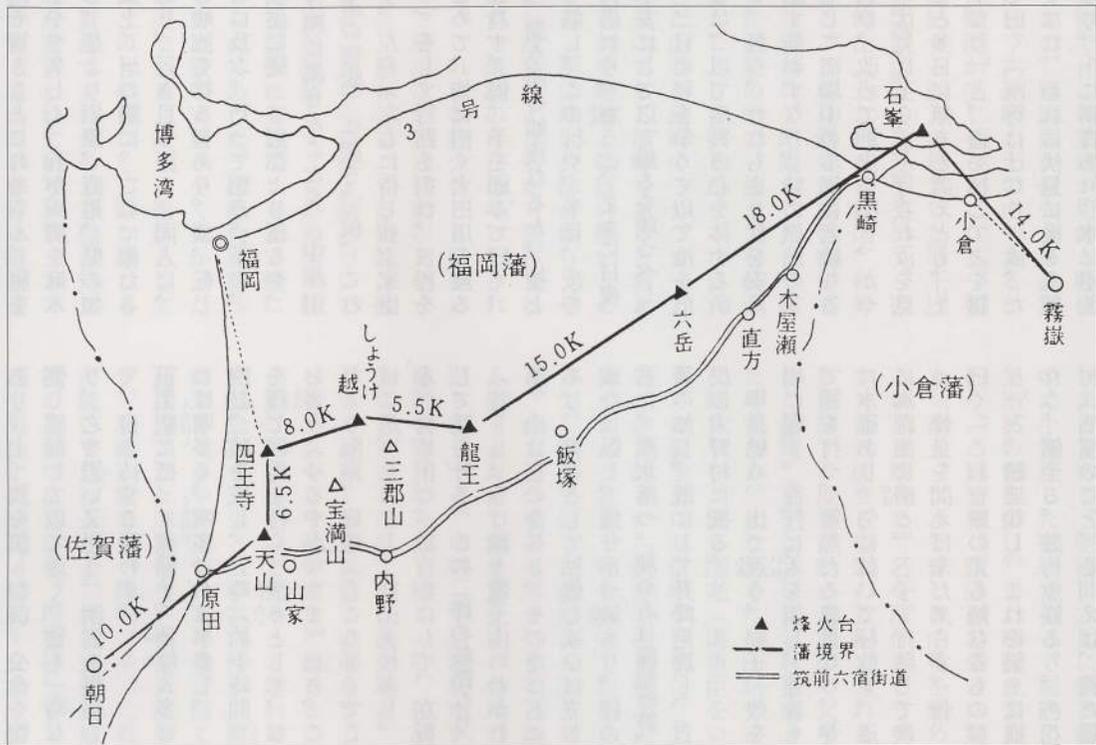
昭陽の烽火台番士は、次の上番が
 淘羅嶺である。よって、この地名は
 か参考を次にする。

淘羅嶺（しょうけつ）・現嘉穂郡
 筑穂町。同町に合併以前は、内住村
 （ないじむ）として、しょうけつの
 裾を引く山農村である。福岡方面か
 ら同地を訪れるには峽流の岩道を辿
 り、しょうけつを越えるまで難所に
 された。筆者の親戚往来は徒歩によ
 る以外なかった。近年タクシーの通

雨歇む。暁色甚だ爽やかなり。敵町
 駅に至る。一茆簷の掩障に、余が黄
 口の書を貼るを見る。之を問うに、
 家君の旧館人なり。青柳駅に至る。
 厨より出すは、白梅のみ、寅弟皆寡
 飯にして食はれずと矢う。余曰く
 「饗にして百銭なり。逆旅の主人た
 る、また難からずや」と。午鶏啼く。
 遞夫、竹兜を昇ぎ来る。
 矮きこと甚じ。上りて傭僕たり。
 濱男村に至りて、大海の汪洋たるを
 下瞰し、始めて故の吾に復す。咏歩
 して箱崎駅に至る。余、寓弟に掛し
 て曰く「吾が三人は、未だ嘗て面相
 を知らず。而も同爨すること十日、
 奇縁なりと謂ふべし」と。相興に応
 神宮の前に扛釀し、博多に至りて、
 別る。帰れば則ち日の夕なり。

（説明）

烽火台と距離図



行が可能となり、さらに飯塚市への
 バイパス開通は騒音だけで、なお昔
 の山里風景を変えてない。

しょうけつの地名は古いが、昭陽
 の『烽山日記』で、昭陽による淘羅
 は古文辞のせい。辞書を引くと、
 なるほど「しょうけつ」と出る。

いざ『烽山日記』本文に入る。

淘羅嶺第二

九月二十日、六烽、賞かれる所、
 天山（あまやま）は御笠県（現筑紫
 野市）に属し、四王（四王寺山の略）
 は粕屋県（現宇美町、太宰府市）に
 属し、淘羅、龍王は穂波県（現嘉穂
 郡筑穂町、龍王は現飯塚市）に属し、
 六岳は鞍手県（現直方市、鞍手、宮
 田町）属し、石峰は遠賀県（現北九
 州市若松区）に属す。是に於て、予
 まさに穂波県に役せんとす。三更
 （午前一時頃）に起く。昨の別酒、
 未だ醒めず、独り竈に就き、古木の
 皮を剥ぎ、釜の下に於て、これを
 燃やす。霎時して松濤扉を襲い、身
 脚を溼雪す。徐々にして行を治え以
 て同幕（一緒に勤務する相役）を俟
 つ。四更、男女皆起く。唯、聞也
 （昭陽長男四歳）鼻鼾のみ雷を成す。
 犁明、蒲成萍郎来り、門に呼ぶ。酒
 ち発す。花旭塔（博多をいう）の通
 舎に低る。諸山の徐ところなれば、

九月二十日、六烽、賞かれる所、
 天山（あまやま）は御笠県（現筑紫
 野市）に属し、四王（四王寺山の略）
 は粕屋県（現宇美町、太宰府市）に
 属し、淘羅、龍王は穂波県（現嘉穂
 郡筑穂町、龍王は現飯塚市）に属し、
 六岳は鞍手県（現直方市、鞍手、宮
 田町）属し、石峰は遠賀県（現北九
 州市若松区）に属す。是に於て、予
 まさに穂波県に役せんとす。三更
 （午前一時頃）に起く。昨の別酒、
 未だ醒めず、独り竈に就き、古木の
 皮を剥ぎ、釜の下に於て、これを
 燃やす。霎時して松濤扉を襲い、身
 脚を溼雪す。徐々にして行を治え以
 て同幕（一緒に勤務する相役）を俟
 つ。四更、男女皆起く。唯、聞也
 （昭陽長男四歳）鼻鼾のみ雷を成す。
 犁明、蒲成萍郎来り、門に呼ぶ。酒
 ち発す。花旭塔（博多をいう）の通
 舎に低る。諸山の徐ところなれば、

行が可能となり、さらに飯塚市への
 バイパス開通は騒音だけで、なお昔
 の山里風景を変えてない。

しょうけつの地名は古いが、昭陽
 の『烽山日記』で、昭陽による淘羅
 は古文辞のせい。辞書を引くと、
 なるほど「しょうけつ」と出る。

いざ『烽山日記』本文に入る。

淘羅嶺第二

九月二十日、六烽、賞かれる所、
 天山（あまやま）は御笠県（現筑紫
 野市）に属し、四王（四王寺山の略）
 は粕屋県（現宇美町、太宰府市）に
 属し、淘羅、龍王は穂波県（現嘉穂
 郡筑穂町、龍王は現飯塚市）に属し、
 六岳は鞍手県（現直方市、鞍手、宮
 田町）属し、石峰は遠賀県（現北九
 州市若松区）に属す。是に於て、予
 まさに穂波県に役せんとす。三更
 （午前一時頃）に起く。昨の別酒、
 未だ醒めず、独り竈に就き、古木の
 皮を剥ぎ、釜の下に於て、これを
 燃やす。霎時して松濤扉を襲い、身
 脚を溼雪す。徐々にして行を治え以
 て同幕（一緒に勤務する相役）を俟
 つ。四更、男女皆起く。唯、聞也
 （昭陽長男四歳）鼻鼾のみ雷を成す。
 犁明、蒲成萍郎来り、門に呼ぶ。酒
 ち発す。花旭塔（博多をいう）の通
 舎に低る。諸山の徐ところなれば、

能古博物館だより

烽火儼々たり。舗夫足らず、耕夫を取る。耕夫敏ならず亭吏よく怒る。人面紫漲して、その聲蝸蟻たり。予すこぶる塾る。杖を敦て額を掌に安んじて隅に踞る。人声やうやく聞なれば、則ち頭を拾げて馬を問う。始めは、之に則ち秣をすといひ、次には之に水飲ますと曰ひ又之に次いで則ち方に來るといふ。嗚呼、耕夫之の駅に資する、穠老（荻生徂徠）の峽中の嘆、また予の口より出づるかな。少選にして、馬鈴りんりんとして、墻外に嘩く。首をあぐれば、一奴、赭白馬を擁し來る。これを問えば、曰く「これ、天山に赴く遞馬なり」と。予が口、また欠ぐ。尋いで、一奴の紫馬を牽き來るあり。庭に呼んで曰く「洵羅嶺に走く遞馬なり」と。迺ち起つ。龍王峯の望子もまた偕に行く。二又瀨に低る。茶店に御所柿有り。同人、皆、涼床に跪き之を嚙む。予は独り想ふ。去年三月、友也（長女少栗の名）を携え須恵に遊びし時、この野景を美とし、是の亭に憩う。同行に神村玄祿あり。平戸の才子なり。奴久八あり。予の東都（江戸のこと）に従う者なり。玄條と韻を分ちて詩を鳴らす。友也も深愛し側に愉色有り婉容とす。今烽火之役は夷の思う所にあらず。方

柿、何ぞ旨きことこれあらん。脚を立つるやや久しく、我が両脚を麻木せしむ。是より以東、直道、髪のように。武上二州の際に、これに似たるものあり。行き且つ語る。同人に、大田の峻流を渉る者あり。談、転じてこれに及ぶ。乃って想う。予の、朝陽秋侯に従って東都より還るや、伊勢神廟に謁せんことを、中津川（中仙道の宿駅）に謂う。侯、これを許す。左右（左右に侍し並ぶ家臣をいう）をして行路を扱ひ、日程を曆せしめて、皆に曰く太田川を渡るを捷と為す。侯、予を顧みて曰く、「これ、謂う所の峻流なるか。捷と雖も、危し。この行や、予は、汝を南冥に借れり。意うに、まさに日夜、汝の平安にして以て帰るを俟つべし。一日、二日の利を争うて以て汝を危くするは、以て南冥の心を休する所に非ず。且つ、われもまた枕を安んじて臥す能わずなり。特に旅館の主人に命じて宿場中の歩脚に老練なる者を選び、改めて別出を図り、かつ曰く「伏見に至らざるば我れ汝を見ざること多日に無きと雖えども、また離別なり」と。盃を称して之を賜わりて曰く「南行は迂なり。汝、ただ平安なれ。われに伏見に後ると雖も可なり。山に霧毒あり。水に風波

あり。上、旗を慎しむ哉。公命を愷惻し感涙して以て退く。彼も一時なり。之を思い又思う。南雲を恨想して、自ら持する能わず。笹栗駅に抵って書舖す。猗嗟人多ければ嘴多く、嘴多ければ事多し。四鼓、装を成し、五時（約十時間）を経て四里を行く、泄々として、なお沓々（ゆるやかなさま）たり。これより阪路、碌碌（石ころ多くでこぼこ道）たれども、好山美松多し。木戸村に出づ。数百歩にして、左折して蹊を升る。これ二烽の岐路なり。（註）しうけ越と龍王山のわかれ路）山は它的の奇なし。その奇は石にあり。堯々として独処し或ひは立ち或ひは臥し、瘦せかつ嫩あり。蹊の右に、澗水落つ。澗の右は鐘籠篠簞、簞の如し。既にして升降陟靡し、日昃に大野村に抵る。

甲長総八、出で遯う。婦子、穀を場に曝す。番扞に禾を架し、連軋もて稲を打つ。簫然たる農景なり。荅に水碓あり。勺に就いて杯飲す。遂に洵羅嶺に躋る。三子、行膝して俟つ。烽火を問えば未だ來らず。皆、曰く「これ官廨の尤も陋なるものなり」と。鎗架なし。これを梁上に横たう。饋至る。鼓枹魚鮫あり。杏花村（酒屋のこと）を問えば、甚だ遙かなり。壑陬夷落に流されるが如くなり。薄海烽を投ずるの日に当り、平安火も炬かれず。間人間職、この間地に即き、また太だ間なり。夜に迫り、駭駭、林を鼓し山谷駟隱す。詩以て自ら遺る。曰く、「日落ちて雲火の如く、風驚いて山移らんと欲す。烽火殊に意に適ふ、兒女よ、傷悲するなかれ」と。初更、昏寝す。寤むれば則ち燈火滅ゆ。襖中の火鍊石を探り、鑽りてこれを點す。烟を吸いて鬱を吐く。簞を出づれば、月懸ること半壁、天、回青の如し。峻嶺、頂を圧し、墮山（狭く長い山）、脚に伏す。気色凄壮たり。

二十一日、独り起き、形勝を回瞻す。両山、南北に屏立し、嶙峋威紆（けわしい山が長く連なるさま）として、東西に相抱く。眸へば、巨いなる饜饉の如し。我、その柁樓に立ちて、以て望めば、船梢は、以て豊の山を撫すべし。艫後は、以て肥の山を攪るべし。舷に據るのは観は、終に求むべからず。然も歳ここに秋なり。霜葉、錦を積翠中に曬し、天然の畫ける屏風なり。聊か以て宗少文（南宋の書画人）に傲るのみ。これを六岳に比するに、狭少にして、人目に慊よらず。これ、ただ俗史に陋なるのみにあらず。（次号につづく）

『空しかった肥筑両藩の烽火台』

亀井昭陽「烽火日記」の概要

庄野寿人

長崎警備の非常通報設備

文化六年（一八〇九）、福岡藩は幕府に命じられて長崎警備の非常を迅速に通報するため、領内に六ヶ所の山を選定し、各山に烽火設備を築造した。

よ り だ 博 物 館 古 能

これは佐賀藩も同様で長崎街道に沿った、諸山高所に設営、福岡藩との連結を期した。これによって異変の発生を長崎奉行の指示で、両藩の各烽火台が順次に点火することで、小倉藩に伝える。小倉藩は直ちに急飛脚を準備して待機し、次で送られる状況を大阪城代に急報する、というものである。

徳川政権の強固な鎖国政策も中期を過ぎた寛政以後になると、露英米の艦船による、わが国沿海への侵害が頻発した。とくに文化五年八月、英艦フェートン号による不法な長崎入港は幕府当局に大きな衝動を与えた。

20 号
第 9)
フェートン号はイギリス軍艦でありながら、オランダ国旗を偽装して堂々と入港。これを知らずに出迎え

さて、福岡藩が設営した烽火台の場所は次の通りである。図表とともに参照を願う。

御笠郡天山（現筑紫野市山家の天山）

山

粕屋郡四王寺山（筑紫郡太宰府町）

穂波郡庄内村しょうけ越（嘉穂郡

筑穂町字内住）

穂波郡八木山龍王嶽（粕屋郡篠栗

町）

鞍手郡下新入村六ツ嶽（直方市）

遠賀郡藤木村石峯山（北九州市若

松区）

福岡藩は天山（あまやま）に佐賀領朝日山（現鳥栖市）の烽火を受けて前記記載順に各山が烽火を打揚げる。最後は石峯山で、これを小倉藩が領内の霧嶽（足立山）に受け止めるのである。

各烽火台の状況は「龍王」が最も高く六一五メートル、次は「しょうけ越」の約五〇〇メートル、最低は「天山」で約二〇〇メートル、他の三山はいずれも三〇〇メートル前後で比較的に低山である。しかし、各山の重要な使命である視線連結と中間の障害のない地勢条件は最良で、これは現在の地図によって容易に判断することができる。ただ、直線近距離的でない疑問が生じるが、この

ことは例えば天山から四王寺山、しょうけ越について考察すれば理解される。それは高山である。宝満山（八六九メートル）、三郡山（九三六メートル）を避けた方法である。いま一つの事由は、四王寺山の烽火は福岡藩が城内にも連絡をつける方法にしたことである。

烽火台を比較的的低山に設定した理由は、高山には特有の雲霧、また雨天など気象による障害が多いこと。そのほか烽火設備の維持上の問題、加えて昼夜を間断なく見張りに当る番士をはじめとする多人数の従事者に対する便宜上の考慮もあったとしなければなるまい。

烽火台の勤務士に対する炊飯と給養、その他の諸役務に従事する人員の供給などは、すべて麓村の負担である。そのほか番勤交替ごとの武士に対する送迎、道案内などには地元

の庄屋以下村役人が当り、これにも相当の苦勞ももたらしたと思われる。しかしこれらの事情は本誌の目的外であるかと考えて省略しよう。ただ、これらの推考も含めて詳細に記述した資料があることを参考までに紹介しておきたい。それは、福岡藩の儒者であった亀井昭陽（一七七—一三三六）の「烽火日記」である。

能古博物館だより

名文の体験記録

「烽火日記」は、亀井昭陽自身が烽火番士として六山すべてに勤務した体験記録で、文体は彼が得意とした古文辞調の漢文である。当時の漢学者からは名文として好評され、そのために転写(写本)されて広く読まれた。

以下、その内容を簡略に述べてみよう。

昭陽は、もともと福岡藩西学問所(甘棠館)の教官である。福岡藩は天明四年(一七八四)東・西両学問所を創設した。当時は諸藩が競って藩学校を設立した時代であるが、福岡藩の二校開設は他藩に例を見ない。このために初期に於いては両藩校が互いに文運を競いあうという風潮も見られたが、学派の相違もあってだんだんと反目を生じる結果を招いた。両者の優劣は別として、十五年後の寛政十年、西学問所は付近の出火に類焼する災厄に見舞われた。このため藩当局は再建することなく廃学の機会とした。これによって西学問所の教官全員は儒業職を解かれ、従前の給禄のまま平士(特別の学芸、技術で仕えない一般の武士)に改編された。昭陽もこの一人で、彼は城代組の組士に編入され、このため普通

の武士として諸番役に就く立場に置かれていた。

昭陽が烽火番士に任命されたのは、福岡藩の烽火台設営と同時にである。即ち「烽火日記」によると、文化六年八月三日、彼は城内に出頭を命じられて組頭から申渡しを受けた。

当時の昭陽は、自分の屋敷(旧西鉄市内電車今川橋を西に渡ったすぐ左側の角地、樋井川々畔)で私塾教授をしていた。彼の学風と教育を慕う門弟が次第に増加、そのために塾舎を増築した直後であったことが「烽火日記」の書出しである。任命を受けて二十日後の八月二十三日早朝に出発して鞍手郡六ツ嶽に向かうのであるが、当日は未明に起床、まず父南冥に挨拶、また四人の幼い子女に接して、まだ目覚めない幼児にはその額にやさしく手を当てる無言の別れを告げる。当時の風土と衛生は短期間の旅立ちであっても生別が死別に急転することが多く、こうした心情も察せられて真に胸を打たれるものがある。

苦労した番士

番士は、各山とも三人一組で、到着後は十日間、山中箪居の勤務生活である。交替番士の到着を待って下山するのであるが、この間に烽火台

亀陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子④・西嶋洋子④ 岡部六弥太④・村上靖朝④・星野万里子④ 小田一郎②④・吉村雪江④・遠水忠兵衛①④ 財部一雄④・桑形シエ④・田上紀子④ 安松勇一④・宮徹男①④・田上良一④ 西村忠行④・高田浩二④・片岡洋一②④ 桑野次男④・玉置貞正④・石川文之④ 木戸龍一④・藤木道子③④・原重則②④ 西橋七郎③④・藤木久子④・和真治④ 西川真澄④・末松仙太郎④・板木継生④ 行成静子④・鬼塚義弘④・坂田泰滋④ 橋本敏夫④・三宅碧子④・山内重太郎④ 星野金子④・中畑孝信④・吉原湖水④ 岩重二郎④・横山智一④・宮崎集④ 岡本金蔵④・青柳繁樹④・都筑久馬④ 岩下須美子④・斎藤拓④・吉村陽子④ 石橋観一④・桃崎悦子④・西政憲④ 林十九楼④・大神敏子④・安永友儀④ 磯崎啓子④・土屋正直③・三角健市③ 織田喜代治③・上田博③・鶴田スミ子③ 西尾健治②・伊藤康彦③・黒川松陽② 塚本美和子②・長八重子②・石川松陽② 寺岡秀實②・柳山美多恵②・日野和子② 隈丸清次②・奥田稔②・原田種美② 岸洋子②・長尾茂穂②・井上敏枝② 平河涉②・葉山政志②・久芳正隆② 古賀清子②・荏山雅敏②・前田静子 田中和子②・肥塚善和②・野口隆 松尾治郎②・川島貞雄②・石村マツノ 藤野耕典②・富重芳子②・星野玄 半田幸典②・久野敦子②・原口虎夫 福田満須美②・野田俊隆②・丸尾好幸 原敬道②・鶴田俊隆②・丸尾好幸 荒巻重義②・高木千寿丸②・武藤瑞こ 富永紗智子②・森志げる②・林千代子 浜野信一郎②・糸山好太郎②・山口由利子 吉田洋一②・神戸純子②・森本憲治 由比章祐④・(大野城市)・伊藤泰輔④

- 田代直輝④・山田栄④・執行敏彦 久野敦子④・(春日市)・後藤和子④ 白水都④・筑紫野市④・横溝清④ 脇山涌一郎④・川浪由紀子④・原富子③ (太宰府市)・中村ひろえ④・佐々木謙④ 古賀謙二④・平岡浩③・西尾弘子③ 末松祐和④・蔵田はつよ④・(筑紫郡) 精城徳也④・(粕屋郡)・神崎憲五郎④ 榎田正己④・榎田猶子④・酒井俊寿③ 青木良之助④・友野隆④・松本雄一郎③ 鈴木惠津子②・川原敏子②・長崎栄市 井手加維子④・(宗像市)・木村秀明③ 益尾天嶽③・(甘木市)・佐野至④ 酒井カヨ④・宮崎春夫④・黒川邦彦④ 井手太④・井上清④・田中トクエ③ 富田英寿③・(朝倉郡)・鬼丸雪山④ 山崎エツ子②・(飯塚市)・小山元治④ (浮羽郡)・吉瀬宗雄④・(大牟田市) 蔵村魁④・(筑後市) 中島栄三郎②・(苅田町)・木下勤④ (北九州市)・片桐三郎④・平野巖④ (久留米市)・庄野陽一④・(柳川市) 久島政信④・(直方市)・山本利行④ (佐賀県)・甲本達也④・(大分県) 寺川泰郎④・田本政宏④・(長崎県) 浦上健③・(熊本県)・濱北哲郎④ (山口県)・大塚博久③・(大阪府) 小山富美②④・前田敏也子③・(大分県) (滋賀県)・辻本雅史②・(愛知県) 杉浦五郎④・庄野健次③・(神奈川県) 中野學②④・林田睦④・(東京都) 片桐中代④・山根貞②④・村山吉廣③ (埼玉県)・関野さ③④・(石川県) 丸橋秀雄③・(宮城県)・田中樞彦③④ 【協賛会員(個人)】 片桐寛子(福岡)④・中村登(福岡)④ 大里豊男(福岡)④・広瀬忠(福岡)④ 笠井直三(福岡)④・早船正夫(福岡)④ 菅直登(福岡)④・野口一雄(福岡)④ 荒木靖邦(福岡)④・梅田光治(福岡)④ 浄満寺(福岡)④・永田蘇水(福岡)④

が設置された山中での状況をさまざまと描写している。詩情を催す境地から俄かに急変する天候、或は深夜に聴く峡谷からの得体の知れない叫声には怪力乱神を信じない堂々の経学者昭陽も薄気味の悪さをかくしきれないのである。また勤務中の人事も克明に誌し、休憩中の相役が家庭から携行した手内職じみた営みに貧窮武士の哀れを感じ、公命の賦役に苦悩する里人に同情を覚え、幕藩体制への批判めいた気持ちにも及ぶ。

武士名の昱太郎を昭陽と知った村役人などに彼は揮毫をせがまれる。さらに昭陽の来往を風聞して、はるばると、山中を見舞いにおとずれる旧門弟や詩人との応酬など筆紙につぎない記述も多い。

烽火番に任命された武士は各山三名を一組(後に二名に減じる)とし、十日毎に交替、下番して二十日後に勤務することは前述したが、これによって総員八十名を越える編成があったことになる。この中で日記として文学的な記録を残したのは昭陽一人のようである。この点では福岡藩の烽火番制の実情を知る貴重な歴史資料といえよう。

烽火番の存続は六年、文化十三年に幕命で廃止された。もともと幼稚

に過ぎるような通報制度であったが、これに要した藩の負担、設置諸山をかかえた郷村の犠牲は多大なものがあつたと推察される。

結びとして烽火台廃止のくだりは藩の公式記録を引用しておく。

◎黒田世譜「黒田斉清譜」(原文のまま)

『後文化十三年に至て、急を告るに烽火斗にては其事委しく分くらぬより、其跡に必急飛を発するに、烽火の場所は何れも嶮山絶壁にて道嶮しければ往還を走るよりは遙に隙とり、且烽火にて異船入津を知らたり共人数の多少出張の緩急も定かなければ長崎にて火を挙るに至らば、其地にある家人に達せられよ、直に本州には急飛にて通する事甚便也。元速に通せん為に命せられし烽火なるに却て遅々する由を告げれば奉行所より老中に告て指図を待けるに両家より同じ通りに心得へしと、五月に至りて烽火台は悉く毀ちぬ』

これによって福岡佐賀両藩とも後に遠まわしに非実用性を訴えて、ようやく廃止を得たことがわかる。それにしても六山の烽火台跡は、すでに一片の石もとどめていないのであろうか。

- 奥村宏直(福岡)③・安倍光正(福岡)③
 沖 双葉(福岡)④・七熊澄子(福岡)④
 熊谷雅子(福岡)②・上田 満(福岡)①
 亀井准輔(福岡)③①・富安 渡(福岡)①
 大原敬吉(飯塚)④・具嶋菊乃(甘木)④
 大久保津智夫(嘉穂)④・庄野直彦(直方)①
 原田國雄(宗像)④・森光英子(久留米)②
 西喜代松(共世)③・中山重夫(唐津)③
 緒方益男(佐賀)④・七熊太郎(佐世保)④
 七熊 正(佐世保)③・浦上 健(長崎)③
 小堀定泰(滋賀)③・伊藤 茂(神戸)①
 西村俊隆(東京)④・白水義晴(東京)④
 早船洋美(東京)①・多々羅幸男(千葉)③
 会員ご氏名に④は、会費ご継続四年目をいただいたしす。
 (一)は多年分のまとめお払い込み、(二)は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州電力 株・大野 茂(福岡) 株
 新 出 光・出光 豊(福岡)
 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
 福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
 株・南川 整形外科・南川勝三(福岡)
 法人 日本製粉福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
 流通 共 済 株・花田積夫(福岡)
 タイム社印刷 株・安部博満(福岡)
 株・笠 忠 夫(福岡)
 博多ちくわ・株・魚嘉 松尾嘉助(福岡)
 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)
 協 通 配 送 株・富安 渡(福岡)
 大牟田運送 株・南誠次郎(福岡)
 株・三島設計事務所・三島庄一(福岡)
 日 西 物 流 株・原 重 則(福岡)
 西日本急送 株・原 重 則(福岡)
 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)
 (南)愛光ビルサービス・野田和禮(福岡)
 延寿産業 株・野田和禮(福岡)
 九州三菱ふそう自販 株・宮崎慶一(福岡)
 (南)安河内商店・安河内紀男(福岡)
 木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成六年四月三十日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。

友の会 年間3千円
 (館)の活動、館誌購読と催事企画に参加
 自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人)年間1万円
 (法人)年間3万円
 『館維持 資料収集、施設整備等の資』
 『金援助を受ける』
 郵便振替口座の変更
 平成6年5月より
 (旧)納入方法 郵便振替 福岡3160970
 (新)納入方法 郵便振替 0170196090

右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。
 財団法人 能古博物館

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

『関秀 亀井少栗伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

限定 二、〇〇〇部
 図録全カラー50頁・本文94頁
 直売頒価 三、〇〇〇円
 (送料 三二〇円)

亀陽文庫聖堂竣工記念講座開設

御案内(好評のため定員増加)

◎中国哲学受講のおすすめ

●講座科目と日程(平成六年四月から翌年三月まで)

科目	講師	日時	単的評言
論語	九大文学部教授・町田三郎	毎第一週土曜月	常識学
老子	九大文学部教授・福田殖	毎第二週土曜月	ハイカラでスマート 人生を快適にする
史記	福岡教育大学教授・菰口治	毎第三週土曜月	悠久な中国史、人間活動の偉大
伝習録	九大文学部助教授・柴田篤	毎第四週土曜月	一寸、専門的

講義は各科目の専門教授が平易でわかりやすく授業されます。各週区切り講義されますので、中間受講も可能です。

講師ご都合による休講は日を変えて補講されます。受講料は(一講座)年一、〇〇〇円(八月を暑中休暇とし各月計一ヶ月分)

(中間受講者は参加月から月割り壱千円計算となります)受講テキストは当方で準備し、各位に交付します。

女性御参加は現在四〇%、積極ご願います。交通は姪浜市宮渡船二時一五分・一〇分能古着。館まで徒歩五分です。

●中食御希望は名物「能古うどん」を館食堂で提供(前日まで予約 電話八八三二二八八一)

●講義開始 一時半から三時終了

◎御寄付受領

- 金壹万円 (五月七日) 森光英子様
- 金壹万円 “ 南誠次郎様

文庫「孔子聖廟」創建

御寄付芳名

- 大牟田運送 光南
- 協通配送 富安
- 出光興産福岡支店 山本
- 南川整形外科病院 南川
- 西日本急送 原重
- 日西物流 原重
- 木原税理事務所 原重
- 福岡銀行 原重
- 権藤税理事務所 藤原
- 九州三菱ふそう自販 宮崎
- 福岡流通警備保障 村上
- 福岡中央銀行 山崎
- 日本製粉福岡工場 山崎
- 箱崎ユートリティ 和嘉
- 箱崎ふ頭 小田

御寄付者芳名(本誌出刊現在)

- 【金拾万円】 原田國雄
- 【金拾万円】 和田慎治・早船正夫
- 上田 満・庄野寿彦・片桐寛子
- 安松勇一・溝口博義
- 【金八万円】 翠川文字
- 【金五万円】 今林 昇・安陪光正
- 笠井徳三・大久保津智夫・石橋観一
- 結城 進・花田積夫・中山一三
- 松尾清美・南誠次郎
- 【金参万円】 森光英子・西 政憲
- 具嶋菊乃・酒井カツヨ・井手 太
- 井手親栄・伊藤 茂・吉瀬宗雄
- 中山重夫・井上 清・肥塚善和
- 木下 勤・荒木靖邦・神崎憲五郎
- 斎藤 拓・寺川泰郎・住吉啓一
- 上田 博・野見山 薫

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)

休館日 毎週月曜
(月曜日が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月3日

入館料 大人300円・中高生200円

交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881

- 【金貳万円】 江崎正直・井手ゆうじ
- 村上五一・疋田文五郎・吉松一成
- 丸橋秀雄・庄野健次・上田良一
- 浦上 健・若下須美子・松本修一
- 庄野陽一・山中耕作・神田正明
- 【金壹万円】 西尾健治・片岡洋一
- 村山吉廣・星野 玄・甲本達也
- 吉原湖水・黒川邦彦・佐野 至
- 宮崎春夫・桑形シズエ・大里豊男
- 辻本雅史・花村信也・橋本敏夫
- 末松仙太郎・青柳繁樹・小山元治
- 富田英寿・板木継生・大塚博久
- 莊山雅敏・桑野 顕・永岡喜代太
- 安永友儀・岩永 皓・河村新一
- 岡本金蔵・市丸義春・財部一雄
- 神谷 誠・佐々木 謙・三宅碧子
- 田代直輝・森 重人・川浪由紀子
- 小山富夫・藤野昌哉・有松賢作